

主 題：あなたは輝いていますか2

聖書箇所：マタイの福音書 5章14－16節

私たちイエス・キリストを信じる信仰者は神から大切な務めをいただいています。まだこの救いに与っていない人々に、私たちの周りの人々に、主イエス・キリストにある救いを宣べ伝えるという大切な務めです。ですから、イエスは私たち信仰者に対して「あなたがたは世界の光である」と言われました。前回、私たちが見たこのマタイの福音書の5章13節には「あなたがたは、地の塩です。」とあります。

「世界の光」だけでなく、「あなたがたは、地の塩です。」と言うのです。私たちは塩の働きを知っていますが、簡単に見て、少なくとも三つあります。①味付けをする。②冷蔵庫のなかったその当時、防腐剤として腐敗から食物を守りました。③渴きを与えます。ということは、主ご自身が信仰者である私たちに対して「あなたがたは、地の塩です。」と言われたということは、私たちは私たちの周りの人たちに「渴き」をもたらす存在であるということです。すなわち、私たちの周りの人々に、イエス・キリストによる新しい人生への渴きをもたらすのです。人々がこの主に心引かれて行くように、この救いへと導かれて行くように、そのような渴きをもたらす者が私たち信仰者であると主は教えてくださるのです。

なぜ、そのような働きが私たちに可能なのでしょうか？私たちは生まれ変わったからです。私たちは新しく造られたからです。別の言い方をすれば、私たちは主から本当の幸せをいただいたからです。今、私たちが見ているマタイの福音書5章ですが、13節の前、3－10節まで、そこには八つのクリスチャンの特徴が記されています。イエス・キリストを信じた者の特徴です。また同時に、このようなすばらしい祝福、このような幸せを得るための秘訣までも記されています。今は時間がありませんから、それを細かく見て行くことはできませんが、すでに、私たちはこの礼拝の説教を通して学んだ箇所です。

☆信仰者の生き方 マタイ5：3－10

1. 「心の貧しい者」：自分の本当の罪深さを知っている人です。自分が神の前にどれほど罪深い存在であるかを知っている人です。同時に、自分自身で救いを得ることは不可能であることを知っているのです。どんなに頑張っても、どんなに良いことをしても、どんなに徳を積んでも、どんなに奉仕をしても、何をしても私は自分で自分の救いを得ることは出来ない、そのことを知っている人です。

2. 「悲しむ者」：その人は自分の罪を知っているゆえに、それを深く心から悲しんでいる人です。だから、早くそこから離れたい、その罪から離れたいと願います。このような人は神の前に正しい悔い改めへと導かれて行きます。

3. 「柔和な人」：どんなに人が悪口を言ったとしても、人から中傷されたとしても、自分はそれ以下の存在であることを知っているゆえに、何を言われても穏やかな人です。すぐに腹を立ててしまうのは、人の言ったことに対して私はそんな者ではないと思うからでしょうか？人が言うよりも自分は優れていると思うからでしょうか？しかし、ここで言われている「柔和な人」とは、どんな非難も本当の私を現わしていないと思います。なぜなら、私はそれ以下の者だと知っているからです。

4. 「義に飢え渴いている者」：この人は主イエス・キリストに似た者になりたいといつも願っています。神に喜ばれることをして行きたいと願っています。それは救われた者の特徴です。

5. 「あわれみ深い者」：主によってあわれみをいただいた者として、人々にそのあわれみを示して行くのです。人々を愛して行くのです。

6. 「心のきよい者」：自分のすべてが神の前に常に喜ばれることを願っている人です。これも生まれ変わった者の特徴であることは明かです。神に喜んでいただきたいのです。

7. 「平和をつくる者」：神との平和を得た者、つまり、救われた者として、今度は人々の間に平和を作る者として歩んで行きます。その人は分裂や分派を作ろうとはしません。争いをもたらそうとはしません。その人はそのように人との平和をつくる者です。

8. 「義のために迫害されている者」：信仰ゆえに様々な迫害を経験する人です。この世にあって、神の前に正しく生きようとするとなぜいろいろな問題を経験します。苦しみを経験します。

これが救われている人の特徴です。「このような者は幸いです。」と「幸せな者」の八つの特徴を3－10節で教えています。心から罪を悔い改めて、主イエス・キリストを自らの救い主と信じ、従うことを決心した人が救いに与った人なのです。どのようにしてこの救いに与るのでしょうか？今見て来たように、自らの罪に気づき、その罪を赦してくださるこの救い主にあわれみを請うのです。救いを求めて出て行くのです。人生のすべての罪が完全に赦され、神の子どもとして新しく生まれ変わったこと、そ

れはこんなに大きな祝福を神から一方的にいただくことです。だから、このように言えるのです。「私たちはこの地上にあって最も幸せな者だ。」と。なぜなら、私たちはこんなに大きな祝福を主からいただいたからです。この世の人々がどんなに努力しようと、この神の幸せを得ることはできません。これは神ご自身が、また、神だけが与えることができるものだからです。

私たちはクリスチャンでなくても、この「幸い」ということばを口にし、また、目にします。「幸い」という漢字は元々は手にはめる手かせを描いたもの、そこから出て来ています。手にかせをはめるのです。手かせをはめられる危険から危うく逃れたというところから、「幸い」ということばが出て来ました。ですから、広辞苑で「幸い」という定義を見ると、「運が良く恵まれた状態にあること」とあります。このような定義になったのもこのような背景があるからかもしれません。しかし、主が私たちに約束された「幸い」とはそのようなものではありません。運が良かったから、ある問題から解放されたから、解決したからと、そういうことではないのです。主が与えると約束された「幸い」とは、問題があってもなくても、どんな時にも内側からあふれ出る喜びと感謝をもち、心が常に満足している状態のことです。

もし、皆さんがこのような祝福を経験していなければ、私たちの信仰の歩みにどこか問題があるのです。この世のものでは決して得ることのできない神の祝福をいただいた、その祝福をいただいた者として、私たちはどんな時にも喜びをもって、感謝をもって、そして、満足をもって生きることができるのです。それが神がくださったものです。なぜ、そのように言い切れるのでしょうか？イエスがその通りだったからです。その方の祝福を私たちはいただいたのです。広辞苑には「幸い」、また、「幸福」ということばには「心が満ち足りていること」と書かれています。みな、その「幸福」を手に入れようとするのです。でも、残念なことに、この世のものによっては本当に常に心が満たされたこの満足を得ることは無理です。主だけが、神だけがそれを私たちに与えてくれるのです。ですから、皆さん、イエスが言われたように「幸いなるかな、幸せな者たち」とはこういう者たちだと、そのことをマタイの福音書5章で教えてくれました。

本当の幸せを得た人々、簡単に言えば、その人たちは救いに与った者たちです。罪が赦された信仰者です。だから、私たちはこの世にあって幸せを探している人たちに対して、「あなたがたがどこを探そうと、何を手に入れようと、この神しか与えることのできない幸せを得ることはない。ここに本物がある。」と、そのことを明らかに世に示して行く責任があるのです。なぜなら、みなそのことを望んでおり、みなそれを探しているにもかかわらず、神のところに来るまでそれを得ることはできないからです。だから、もうすでに神のところに招かれた私たちが、そのことを世に明らかにして行く、当然のことではありませんか？私たちはこの世の人々とは違うのです。私たちが優れていると言っているのではありません。私たちは生まれ変わったのです。神の子どもとして生まれ変わったのです。世の中の人たちが見て、私たちを奇異に思うはずです。「なぜ？」と人々は思うはずです。そうして人々は私たちに、そして、私たちを変えてくださった神へと目を向けて行くのです。

皆さんにもそういうことがあったでしょう？教会へ導かれて来たとき、いろいろないきさつがあったことでしょう。恐らく、皆さんの中にも、クリスチャンの人に招かれて初めて教会に来たとき、そのクリスチャンが他の人たちとは違っていたから教会に来たのではありませんか？私が誘われて初めて教会に行ったのは中学生の時ですが、生徒会のその役員の中で一人だけ周りの人たちと違う人がいたのです。ずっと疑問に思っていました。なぜ、この人は違うのだろうか？と。「教会に来ませんか？」と言われたときに、教会がどのようなところか、聖書が何なのか知りませんでした。少なくとも、教会にこの人が他とは違う秘訣があるのだと思いました。それで教会に行ったのです。私たちは世の中とは違うのです。私たちは世の中に生まれ、そして、世の中を生きています。しかし、私たちは「世の光」、「地の塩」として生まれ変わった者として、この世にあって人々に私たちを生まれ変わらせてくださった神を明らかにする、そのために私は生きています。

ひょっとすると、ここに私たちの問題があるのかも知れません。世の中の人たちがあなたを見て、「あなたは違う」と思っているのでしょうか？周りの人たちに私たちは渴きをもたらしめていますか？私たちは救われた者として、幸福をいただいた者として、幸いな者とされた私たちは、この祝福の証をしながら生きて行く責任があります。そのためには日々どのように生きて行くかということが大切なのです。私たちはいろいろなことを語ることができます。でも、ご存じのように、人々は私たちの生き方を見ています。私たちの語っていることが本物かどうかを見ています。「地の塩」である、「渴きをもたらず」という大きな責任をもっています。前回「世界の光である」と見ました。分かっていることは、私たちは光源ではないということです。光本体は神ご自身です。ちょうど、月が太陽の光を鮮やかに反射しているように、私たちも光である父なる神のすばらしさを反射させながら生きて行く者です。

光の働きは物をはっきりと見せることです。この地上にあって、人々は何が真理か分かっていません。

この地上にあって、人々は神がだれなのか分かっていません。この地上にあって、幸せがどこにあるのか分かっていません。だから、私たちはその真理を人々の前に明らかにして行くのです。今でも思い出すのは、イスラエル旅行の際、私たちが夜中の２時に懐中電灯を持ってシナイ山に上った時のことです。真っ暗でした。ですから当然、私たちは懐中電灯を持って行かなければなりません。ところが、段々上って行くうちに電灯を消しても道がよく見えました。月が余りにも明るかったからです。月は私たちの歩んで行く道をちゃんと示してくれました。光が輝くほどにその道ははっきりしました。あなたがキリスト者として輝けば輝くほど、人々はあなたを通して真理を見ます。

もう一度、このマタイの福音書５章１６節を見てください。「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と、今見て来たように、私たちはこの神のすばらしい真理、祝福を世の人々に明らかにして行くこと、それがここで言われている「輝かせる」という意味です。

イエスはその後、その結果について話をします。実は、残念ながら、新改訳聖書ではその接続詞が訳されていないのですが、それを入れて訳すとこのようになります。「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、その結果、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」。というのは、私たちが光を輝かせる目的ははっきりしているからです。光である神を信じていない人々、この救いをいただいていない人々が救いをいただく者になるためです。人々が救われるために、そのために私たちは救われ、そのために私たちは今日生かされているのです。彼らが私たちと同じようにこの神を信じ受け入れることによって、彼らも私たちと同じように主を崇める者へと変わることを、それが目的です。だから、光を輝かせ続けて行きなさい、このような人がより多く起こって行くためにと言われるのです。

私たちは前回、愛によってその務めを果たすことができるということを学びました。「神を愛すること」と「隣人を自分と同じように愛すること」、これが最も大切な戒めであると。信仰者の皆さん、そのことを神は望んでいるのです。そのために私たちは造られたのです。でも、私たちは無視して好き勝手に生きました。でも、神はあわれみをもって私たちを生まれ変わらせてくださった。神は同じ目的をもっておられます。あなたが神を愛する者として成長するように、あなたが隣人を愛する者として成長するようにと。前回、神を愛することは、神のくださったみことばの教えに、聖書の教えに従うということでした。また同時に、主が喜ばれることを率先して行なってゆくことだと見ました。そして、人を愛することに関しては、人に害を与えないことであると、ローマ人への手紙１３：１０を見ました。却って、人に最善を施すことであると。どうですか？この一週間を振り返って実践出来ましたか？私たちの問題は「人を愛すること」と聞いて何となく分かっているつもりでも、本当はよく分かっていないことです。「愛」ということばを私たちは頻繁に使いよく聞きますが、それもよく分かっていません。みことばのすばらしい点は私たちのこのような質問に答えをくれることです。愛とはいったい何なのか、神はどのような愛を私たち信仰者に期待しておられるのか、どのような愛をもって人々に接して行くべきなのか、そのことを聖書のみことばは私たちに教えてくれています。それで残された時間「愛」について見て行きます。

☆人に対する信仰者の愛

Ⅰコリント１３：４から人々に対する信仰者の愛がここに記されています。人を愛することに関してパウロは大切なことを教えてくれています。「愛」についての教えの実践です。パウロは１５の具体的な例を上げています。順番に見て行きましょう。

１．愛は寛容である ４節

辞書では「心が広い」とあります。でも、ここで言われている「寛容」はそれ以上のものです。実は、この「寛容」ということばの意味は「忍耐」です。しかも、人に対する忍耐のことです。人から受ける悪に対して、怒ることなく忍耐を持ち続けて行くということです。人がいろいろな悪を為して来る、そのことに対して、怒るのではなく忍耐をもって神の前に喜ばれることを為し続けて行くのです。これが愛だということです。まず、この最初を聞いて難しいと思われたでしょう？難しいことが続きます。

２．愛は親切である ４節

親切とは相手がだれであれ、その人に仕え、その人のために惜しみなく最善を尽くして行きなさいということです。人々の罪に対して仕返しをすることではありません。最初に見たように、寛容である、人の悪に対して怒るのではなくて逆に忍耐をもって、そして、親切である、そのような人たちにあなたは惜しみなく率先して最善を尽くして行きなさいと言うのです。ものすごく難しいとお感じになりませんか？なぜなら、人を愛することが難しいのです。その上、どのような人に対しても愛をもって接しなさいと言われるのです。人の悪に対して怒りをもたない、そのような人たちに、彼らのために最善を為

し続けて行く、どういう意味でしょう？見事に高いハードルが私たちの前に置かれました。どうぞ希望を捨てずに聞いてください。ハードルはどんどん高くなって行きます。でも、そこに希望があります。それは最後にお話します。

3. 愛は人をねたまない 4 節

「愛」というのは人の成功や祝福とともに喜ぶことだと言います。確かに、私たちの生活の中で「どうしてですか？」、「なぜですか？」といろいろな疑問が出て来たり、不公平に感じることがあります。しかし、愛は人の成功や祝福とともに喜ぶものです。

4. 愛は自慢しない 4 節

自分のことを誇っている人のことです。私たちはいったい何を誇ろうとするのでしょうか？パウロのメッセージを聞いてください。Ⅰコリント 1：27－29「しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。：28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。：29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。」と、もし、このメッセージを聞いて、私は弱い者でもこの世の取るに足らない者でもないと思われるなら、あなたは非常にプライドが高いのです。先ほど、山上の説教を見ました。神の前に喜ばれる人たち、神が祝される人たちは人と自分を比較しません。自分の本当の姿を知っているのです。神がご覧になっているように自分を見ているのです。そして、それを実践している人は自分の何ものも誇ることはしません。パウロが言ったように、「…しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。」（Ⅱコリント 12：5）と、パウロは自分に関して、かつては家柄を誇り、教育を誇り、人間みなが追い求めているものを誇っていました。そのすべてを持っていたからです。しかし、イエス・キリストを信じたパウロは「それらはすべてゴミだ。イエス・キリストを信じていること、イエス・キリストこそが私の誇りであり、もし、敢えて私のことを誇るなら、それは私の弱さだ。」と言うのです。だから、パウロは神に祝されたのです。神はパウロを愛されたのです。彼は自分を正しく知り、神が喜ばれる歩みを行なったのです。

5. 愛は高慢にならない 4 節

「うぬぼれ」「慢心」「過大評価」という意味があることばを使っています。実は、この「高慢」ということばは新約聖書の中に7回出て来るのですが、その内の一つはコロサイ人への手紙の中に出て来ます。コロサイ 2：18に「誇り」と訳されています。「あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、」。あとの6回はすべてこのコリント第1の手紙です。というのは、コリントの人々は非常に高慢な者たちでした。プライドが高くうぬぼれが強かったのです。「私はこういう賜物をもっている、私はこういうことができる、私はこのようなことをして来た」と言って、彼らは自分を誇り高ぶっていたのです。そのような人の傍にいと息が詰まって来るでしょう？でも、神を誇っている人の傍に行くと心が励まされます。信仰者の皆さん、そうではありませんか？いったい私たちの何を誇りますか？神の前に立った時に神は何を問われますか？あなたはどんな家を持ちましたか？どのような生活をして来ましたか？貯金はいくらありましたか？どんな仕事をしましたか？と、そのようなことは一切お尋ねにならない、神が問われることは「あなたはわたしに対して、信仰において忠実であったかどうか」です。私たちは見なければいけないものを見るのです。そのような虚しいところから私たちは救い出されたからです。

私たちにとって誇ることはただ一つです。このイエス・キリストだけであり、この方が私たちのために救いをくださった、これ以外の誇りはありません。そのようにパウロは主を誇る者として生きたのです。ですから、「愛は自慢せず、愛は高慢になりません。」と言うのです。どちらも自分のことを後にして人を優先するのです。自慢する人は、先ず、自分ことを優先します。自分のことばかりを考えているのです。高慢な人もその通りです。すべて「私」です。「私を見て！私はこんなことをしましたよ！」と。自分のことよりも他の人に関心を払いなさいと言います。箴言 8：13には「主を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりとおごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」とあります。悪を憎んでいる神は高ぶりを憎むと言います。少しでも、自分は偉いと思っているなら、神はそのことを憎まれるのです。それは愛ではありません。愛は自分よりも人を優先するのです。人よりも勝っていると思うのではなく、却って、自分のことよりも人のことに常に関心を払い続けるのです。

6. 愛は礼儀に反することをしない 5 節

これは「不作法な振る舞い」という意味のあることばです。正しい作法に従っていない、基づいていない、そこでこのことばは「恥ずかしい、不名誉、卑しい、下品、不適当なこと」と、そのように使われるようになったのです。英語の聖書では「無礼、失礼」と訳されています。「愛」は常に相手を尊敬

するゆえに、尊敬の思いをもって礼儀に沿って接しているということです。相手を尊敬しているゆえに、失礼な態度で接していないということです。私たちは神に愛されている者であることをしっかりと覚えるべきです。教会においてもきちんとした礼儀があります。マナーがあります。皆さんよくご存じのことです。私たちはより良い信仰者として生きて行くことです。

7. 愛は自分の利益を求めない 5節

このことばは、英語の聖書では「自分のやり方を言い張らない、強く要求しない」とあります。そのように要求する人は自分のことしか考えていないのです。先ほどから見てるように、愛は自分のことよりも人のことを優先します。私たち信仰者は、神が言われていることは何かと探って、それを優先します。私たちは主に従う者ですから当然のことです。主が何を望んでおられるのか、そのことを知ってそれに従って行きます。私たちの権威はみことばですから、私たちはこれに従う者です。ですから、ここで言っていることは、それとは別に「私は自分の思い通りでなければならない、私はこのように望むからこのようにしなければいけない」と、そのような態度は愛ではないということです。自分のことよりも人の益になることを優先します。

8. 愛は怒らない 5節

「怒らず」、この怒りというのは「腹を立てる、憤慨する」という意味ですが、ここで使われているのは「怒りっぽい、気が短い、かんしゃく持ち」という意味です。というのは、正しい怒りがあるからです。イエスもお怒りになりました。自分の思い通りにならないから怒ったものではありません。イエスの怒りは「罪に対する怒り」でした。でも、ここで言っている「怒り」はそうではありません。この「怒らず」とは、愛とは怒らないということではなく、自分の思い通りにならないことへの怒りです。そのような利己的な態度は愛ではないということです。

9. 愛は人のした悪を思わない 5節

英語の聖書では「悪や誤りを記憶に留めない」とあります。つまり、「人のした悪を思わず」とは、人がするすべての悪に注意を払わないだけでなく、彼らをそれによって悪く思ったり、彼らを責めたりしないことです。人々に対して悪い感情を抱かないこと、それが愛だと言うのです。皆さん、もし、神の愛がこのような愛と違ったらどうでしょう？私たちはこれまで九つのことを見て来ました。神の愛、私たちが行ない続けているその悪に対して忍耐深く赦し続けてくださっています。神は常に私たちのような者のために最善を為してくださっています。しかし、私たちの罪をご覧になって、私たちに対して「何て悪い奴だ!」と思われたり、私たちに悪い怒りの思いをお持ちになるとしたら、私たちは神の前に立つことなど到底できないではないですか？神は赦してくださったのです。愛は人の悪に対してその人たちを悪く思ったり彼らを責めたり、また、悪い感情を抱いたりしないことです。最初に話したように、ハードルは益々高くなって来ました。このような愛をもって愛しなさいと言うのです。まだ、リストは続きます。

10. 愛は不正を喜ばない 6節

愛は決して罪や悪を喜ぶものではないと言うのです。なぜなら、神がこの世の汚れ、この世の罪を見て喜んでおられないからです。なぜ、私たちが喜ぶのですか？私たちは気を付けなければ、私たちの周りには神が喜ばれないことが満ちあふれています。最近、あるきっかけで、今、若者たちの間で流行っている曲を聴いたのですが、最初は何を歌っているのか分かりませんでした。そこでインターネットで見ると歌詞が出て来ました。その歌詞を見て驚いたことは神の創造を非難しているのです。神の創造は不完全であると。それを聞いていて、このような曲が流行っている、このような曲を歓迎している社会、私たちはそれらに対して怒りをもたなければいけないと思いました。神が喜んでおられないからです。そう考えたとき、テレビから流れてくる番組を私たちはイエスといっしょに見たいと思いますか？映画館に行っても出て来る予告を見て「イエスさま、次に見に行きましようか？」などと言える映画がありますか？新聞にもいかがわしい広告が出ていますが、それらがまったくない新聞なんてありますか？ラジオを聞いていても、雑誌を見ていても、神がお喜びにならないものが満ちあふれている世界に私たちは今生きているのです。パウロは言います。「愛は不正を喜ばない、決して、罪を喜ばない。」と。私たちが人々と接しているときに、彼らの罪に対してそれを「よしよし」とは言わないのです。私たちはその罪を憎むのです。同時に、私たちはその罪からの救いの道を語るのです。

11. 愛は真理を喜ぶ 6節

「不正を喜ばずに真理を喜びます。」、つまり、神の教えてくださるこのみことばの真理を追究するだけでなく、私たちはその真理を愛する者です。だから、私たちは間違った教えに対してそれを受け入れようとはしないのです。決して、私たちはすべての点で完璧だと言っていません。しかし、私たちの神の前における責任は、みことばをしっかりと学び、そのみことばの教えに徹底的に従って行くことです。私

たちがどう思うか、どう感じるかなどはどうでも良いのです。神がどうおっしゃるかです。間違った教えが周りに溢れています。だから、私たちはそのようなものに対して、真理を喜ぶ者として、それらから離れることであり、そして、正しいことに従って行くことです。愛とは神の真理を常に喜びます。

12. 愛はすべてをがまんする 7節

「がまんし」ということばは「それを覆う」という意味です。何かによってそれを覆う、覆い隠すということです。その意味から「忍耐」ということばになって行きます。つまり、ここでパウロが「すべてをがまんする」と言っているのは、人のその罪が外に出ないように自らがしっかりと覆ってあげることです。この反対は、人の噂を外に流すこと、ゴシップです。そのようなことはしないと言うのです。ゴシップは、噂話であったり、陰口であったり、無駄話です。そのようなことをしている暇はありません。そのようなことは口から出したくないはずで、信仰者の徳を高めないし、キリストの栄光を輝かせることもないからです。前回も見たように、私たちはそんなことは止めなければいけないのです。そのように決心された信仰者はたくさんいらっしゃるでしょう。私の口から神が耳を覆うようなことばを出したくない。「愛」とは、そのようにいろいろな人の噂を聞いてもそれ以上広がって行かないように自分で止めるのです。それが愛だと言うのです。箴言10：12には「憎しみは争いをひき起こし、愛はすべてのそむきの罪をおおう。」とあります。また、1ペテロ4：8には「何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」とあります。

信仰者の皆さん、噂の発信源になってはいけません。もし、今までそのようなことをして来たのなら、今日止めることです。なぜなら、あなたは神の前に責任を持っているからです。神を愛する者は人をも愛します。このような愛をもって愛する者へと神は変えていってくださるのです。そのためにも私たちは自らの行動をしっかりと吟味しなければいけません。自分に厳しくあるべきです。

13. 愛はすべてを信じる 7節

人を疑うのではなく信じてあげることです。例えば、だれかが罪を犯しているという噂を聞いたならどうしますか？少なくとも、私たちはその事実関係が解明されるまでその人を信じてあげることです。その人を愛するからです。もし、それが事実であったときはどうすればいいのでしょうか？今見て来たように、すべてをがまんするということは、その事実をそこで止めるのです。そのことを他の人に言わないのです。そこで止めてその人が神に立ち返るように祈ることです。必要であれば、その人と話をして「兄弟、罪を悔い改めなさい。」と勧めることです。そうして私たちは正しいことをしようとするのです。愛はすべてを信じてあげることです。

14. 愛はすべてを期待する 7節

決して希望を失わないことです。周りの人々に対して、特に、救いに関しても、悔い改めに関しても、愛は諦めないのです。皆さんの中には一生懸命伝道してもなかなか信仰に至らない家族がいるでしょう？諦めてはいけません。愛をもって語り続けて行くのです。愛をもって祈り続けて行くのです。愛をもって仕え続けて行くのです。愛はこのように期待するものだと言います。

15. 愛はすべてを耐え忍ぶ 7節

7節の最後に「すべてを耐え忍びます。」とあります。このことばは行動的で積極的な不屈の精神を物語っているのです。どんな時にも落胆せずに戦い続けている兵士のようなのです。しんどいと思っても、疲れたと思っても、戦い続けている兵士、それを描いてください。そういう意味です。

だから、今見て来たように、私たちは信じて期待し、そして、耐え忍ぶのです。忍耐をもって希望をもって期待をもって、人々に愛をもって接し続けて行くのです。悲しいことに、多くの人が教会から離れてしまった、私たちは希望をもって、彼らが主の前に立ち返って来ることを祈り続けて行くのです。信仰者として正しく接し続けて行くことです。私たちに必要なことは、信じて、期待して、そして、怯むことなく進み続けて行くことです。これが愛だと言うのです。

見て来たように、ハードルは非常に高いです。しかし皆さん、神はこのことをあなたを通して成そうとしておられるのです。というのは、この15の教えを見たときに、これらはすべて動詞なのです。どう意味かと言うと、神の関心は私たちが知識として頭に蓄えることではなく、これらを実践することです。あなたがこのように生きて行くことです。そして、あなたがこのように生きて行くことを望んでいる神は、これが実戦可能であるということをあなたに伝えたいのです。どのようにして？神が何を望んでおられるかが分かった私たちは、「神さま、私は今日からそのように生きて行きたいです。」とその決心をもって、それを可能にしてくださる神に助けをもらって歩んで行くことです。このようにして私たちは歩んで行くことが出来るのです。このような愛をもって人々に接して行くことが可能なのです。でも、そのために必要なことは、私たちは「神さま、このように生きて行きたい。あなたが教えられたように私は愛を実践する者になって行きたい。助けてください。」と願うことです。私たちは変えられて

行くのです。

ジョン・マッカーサー先生はこのようなことを言います。「パウロのこのコリント第1の手紙における第1の目的は何か？それはただ単に、コリントの人々を教えるというのではなく、彼らの生活の習慣を変えるためだ。」と。パウロが一番望んだことは、コリントの人々の生き方が変わって行くことだったのです。彼らのこれ迄の歩みが一変して、新しい歩みを始めて行くように彼らが変わえられることです。同じことを神は私たちに望んでおられるのです。私たちが変わって来ること、生き方が変わって来ることです。そうでなければ、地の塩として人々に渴きをもたらすことなどできないからです。そうでなければ、世界の光として神のすばらしさを世に証することなどできないからです。私たちが示すのは、こんな私を救ってくださり、こんな私を変えてくださり、こんな私をこのすばらしい働きに用い続けてくださっている栄光の主です。この方を明らかにするのです。この方のために私たちは生きているのです。

信仰者の皆さん、このような人になりたいと思いませんか？このような愛を実際に毎日の生活に実践する者として生きて行きたいと思いませんか？神はあなたを変えてくださるのです。繰り返します！「主よ。どうぞこんな人に私を変えてください。私はこの点にも、この点にも、すべての点において愛に欠けた者です。どうぞ、私を変えてください。」と、なぜなら、私たちが見て来たこの「愛」は、主イエス・キリストの愛です。主ご自身が私に示してくださった愛です。そんな人に私は変わりたいと、その決心をもって、その祈りをもって、今日この場を去ることです。主はあなたの内に働いてくださり、あなたを変えてくださる。そして、あなたは地の塩として用いられます。人々に渴きをもたらす、神が一番望んでいる働き人としての働きが始まります。そのような決心をして歩んで行くことです。その決心をして今日から再び神に用いていただく、そのような人生を歩み出すことです。

皆さん、そのことを望みませんか？一人ひとり、神の前にそのことを祈り求めて、今日から新しい歩みを始めて行きましょう。